

母 乳 栄 養 に つ い て

その1 秋 田 県 の 現 状

伊 藤 玲 子* 足 立 冬 子* 石 塚 志 津 子*

I はじめに

近年母乳育児の重要性が世界的な関心事となっており、昭和49年にはW・H・O、国連の各専門部会で、母乳育児の推進について勧告が出された。厚生省も50年1月には「全国母乳栄養推進」を運動¹⁾としてとりあげ、本県でも母子保健の重点事項として、市町村に呼びかけている。

こうした社会情勢のもとで、秋田県の母乳栄養の実状と、モデル地区神岡町から、新生児期の栄養法の実態を調査したもので、報告する。

II 調査方法

秋田県の実状については、3カ月児健診時に使用されているアンケート²⁾から、母乳、人口、混合栄養（以下栄養省略）の割合、ならびに地域別の状況について、昭和47から50年までの計13,857名を調査した。

また、モデル地区神岡町については、生後1週間の栄養法から、母乳栄養の最大の目的である初乳（生後1週間の母乳）に重点をおいて、昭和48～51年までの乳児336名について、新生児訪問時の記録、および、母子健康手帳の記載を資料とした。

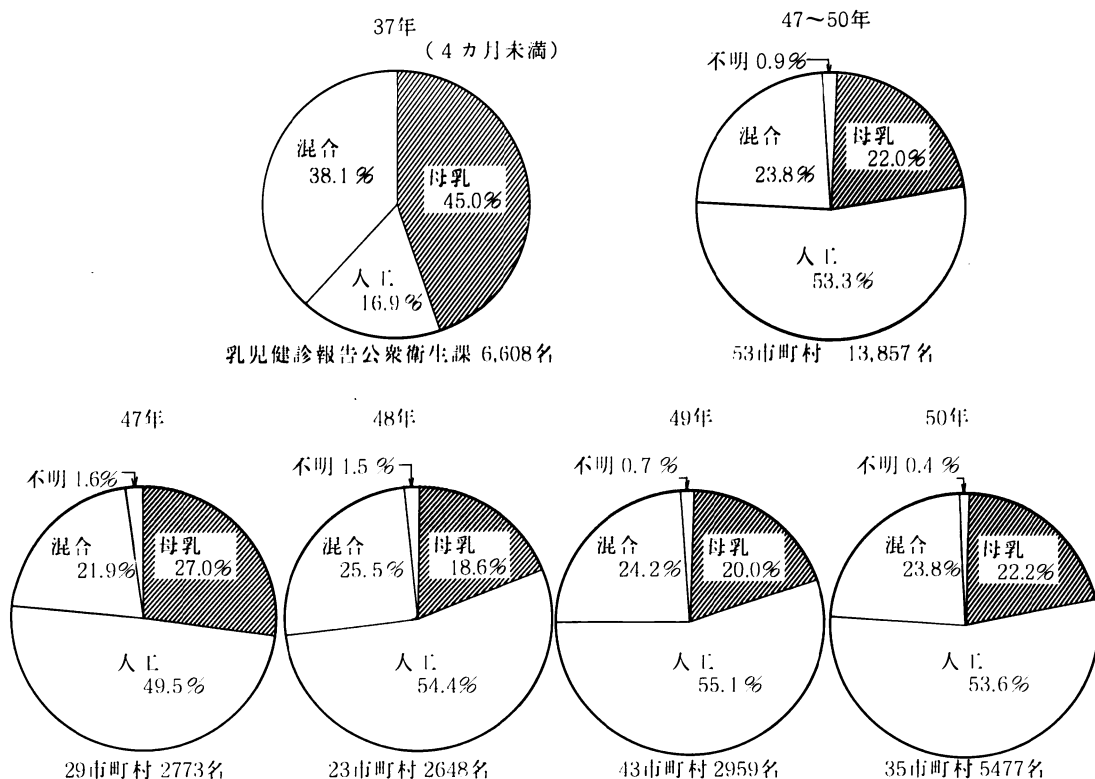


図1. 乳児の栄養法の変遷（秋田県）

*秋田県衛生科学研究所

Ⅲ 調査成績

A. 秋田県の状況

1. 栄養法の変遷

図1に参考資料として昭和37年の市町村乳児健診の4カ月未満児 6,608名の栄養法をかかげたが、これと47年を比較してみると、10年の間に母乳は45%から27%に減少し、人工が16.9%から約3倍の49.5%に増えている。

昭和47～50年までの総数13,857名の3カ月時点の栄養法は、母乳22.0%、人工53.3%、混合23.8%で、その年次推移についてみてみても、ほとんど差がみられない。

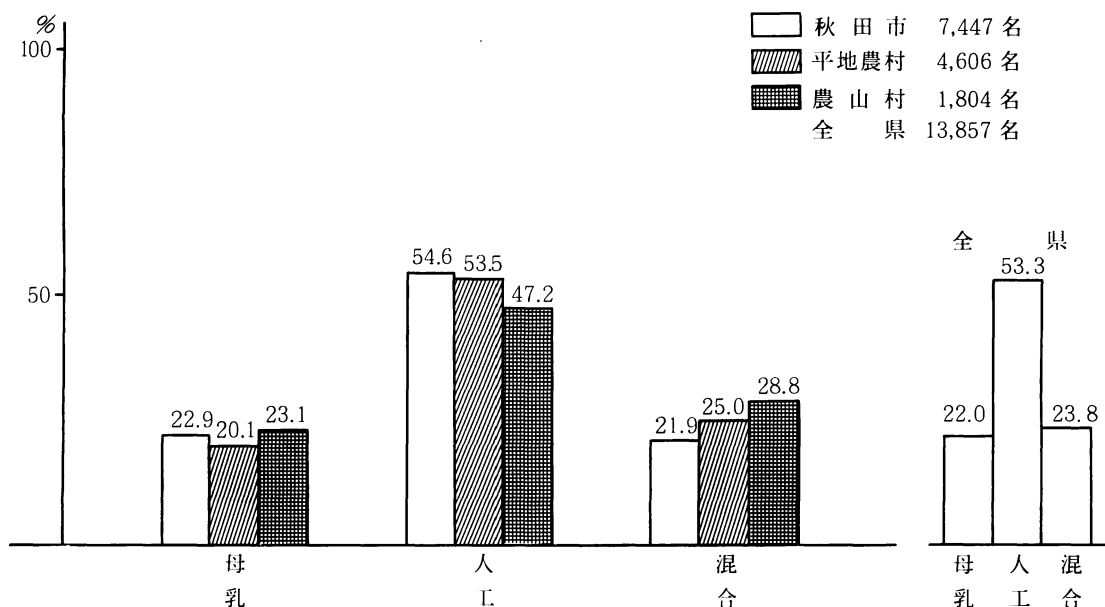


図2. 3カ月児 地区別栄養法 昭和47～50年（秋田県）

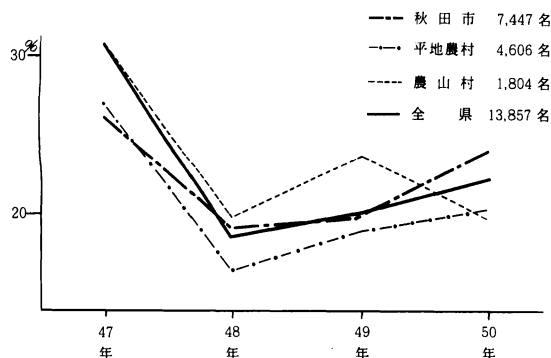


図3. 3カ月児 地区別母乳栄養年次推移 昭和47～50年（秋田県）

ただ、48年に減少した母乳が、49、50年と漸増の傾向がみられるのが有意差はない。

2. 経済地区帯別よりみた栄養法

昭和47～50年の53市町村の3カ月児健診併用のアンケートを用い、農林省経済地区帯区分分類によって、秋田市、平地農村、農山村に分け、各栄養法の地域差をみた。図2の如く、地域差はほとんどみられない。

図3は、母乳について秋田市、平地農村、農山村と地区別の年次推移（昭和47～50年）を示したもので、いずれの地区も48年に減少しており、特に平地農村、農山村の減少がめだっている。50年には、農山村を除き、上昇

傾向をしめしている。

B. モデル地区神岡町の状況

愛育病院の内藤先生は、「新生児期の第1回の授乳は、絶対に母乳であるべきだ」という考えを力説しておられる。そして「愛育病院では母乳主義で、生れてすぐから5日間は、いくら出なくとも母乳だけを吸わせ、毎日の補乳量0が5日間続いたら、6日目から他のものを足そうにしている³⁾」とのべておられる。

この内藤先生のお考えを参考にして、神岡町の乳児336名の、授乳開始日から、生後7日目までの栄養状況を、母乳を中心にみてみた。

1. 授乳開始日の栄養法

「第1回目の授乳を母乳に」という観点から、乳を飲んだ最初の日の栄養法をみると、表1の如く、母乳を飲

んだものはわずか28名（8.3％）で、混合20名（6.0％）、人工288名（85.7％）となっている。混合について、母乳の方が先に授乳されたと仮定しても、第1回目の授乳

表 1. 授乳開始から生後7日目までの栄養状況

昭48～51神岡町						
授乳 開始日	生後7日目まで		※他の栄養法に変わったものの内訳			
	引き続き 同じ 栄養法	※他の栄 養法に変 った	母乳	混合	人工	2回以上 変わったもの
母乳	28 (8.3)	20	8		7	1
混合	20 (6.0)	13	7	4	2	1
人工	288 (85.7)	47	241	▲66	157	18
計	336	80	256	70	164	2

() % ▲人工→混合→母乳と変っていったもの
14名を含む

表 2. 授乳開始日が人工栄養 288 名のうち生後 7 日目までに他の栄養法に変わった 241 名の母乳を飲んだ日

生後 日数	1 日	2 日	3 日	4 日	5 日	6 日	7 日
	3	36	93	69	19	10	11

201名（59.8％）

を母乳にできたものは、48名（14.3％）である。

そこで、残りの人工 288 名の中に、努力することにより、第1回目の授乳を母乳にできたものがあるのではないかと考え、その可能性について調べてみた。

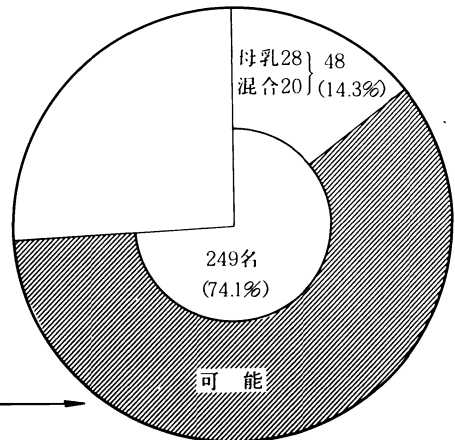
まず、表1の生後7日目までに人工から他の栄養法に変わった241名について、母乳を飲んだ生後日数をみると、表2のようになる。すなわち、先の愛育病院での方法を参考に、母乳確立のための飢餓状態を最大生後4日とすると、201名（59.8％）に、第1回目の授乳を母乳にできる可能性があることになる。

したがって、第1回目の母乳確立児の総数は、表2の円形の如く母乳の28名、混合の20名、それを努力することによりその可能性のある201名の計249名（74.1％）が想定されることとなる。

2. 生後1週間の栄養法

分娩後1週間の母乳は初乳と言われ、母乳の中でも特に重要な役割をはたしている。

第1回授乳を母乳にできる
可能性



昭 48 ～ 51 神 岡 町

そこで、初乳の与えられる可能性についてみることにし、生後7日目まで母乳だけで過ぎたものは表1の如く20名である。

しかし、混合から4名、人工から66名の計70名が、7日目までに母乳だけになっている。

この70名の母乳だけに変わった生後日数をみると表3の如くで、前述の第1回授乳と同様の考えで、母乳確立のための飢餓状態を最大生後4日とすると53名（15.8％）が、母乳だけで7日目まで過ぎたことになる。

したがって、ミルクを飲まずに、初乳だけで生後7日目まで過ぎることのできたものは、表3の円形のように最

初から母乳の20名と、生後1～4日で母乳になった53名の計73名（21.7％）となる。

Ⅳ まとめ

1. 秋田県の母乳栄養の実態を昭和47～50年の3カ月児健診13,857名について調査した結果、平均、母乳22.0％、混合23.8％、人工53.3％で、地域別の差はほとんどない。年次推移では、49、50年とやや母乳上昇の傾向がみられる。

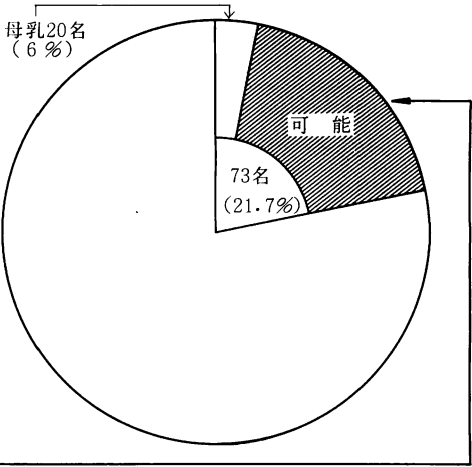
2. 神岡町の昭和48～51年の乳児336名から、初乳授

表 3. 授乳開始日が混合，人工のもの 308 名のうち，生後 7 日目までに母乳だけに変った 70 名の母乳だけになった日

生 後 日 数	1 日	2 日	3 日	4 日	5 日	6 日	7 日
	1	10	27	15	6	5	6

53名 (15.8%)

生後 7 日目まで，母乳だけで
過ごすことのできる可能性
(初乳)



昭48～51 神岡町

乳の可能性をみると，第 1 回目を母乳にできるもの 74.1%，生後 7 日目まで母乳だけで過ごすことのできるもの 21.7%となった。

文 献

- 1) 厚生省児童家庭局：母乳運動の推進について，小児保健研究，34，(1)，46—48 (1975)
- 2) 伊藤玲子たち：乳児健診におけるアンケート併用の効果，その 2，アンケート用紙からみた先天異常，秋田県衛生科学研究所報，No.20，115—123 (1976) 一部未発表
- 3) 内藤寿七郎：母乳栄養の精神，心理学的意義，小児科診療37，(9)，37—44 (1974)